

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 塩野崎 信也

【所属】 京都大学大学院 文学研究科

【研究題目】 「アゼルバイジャン人」アイデンティティーの形成過程

【研究の目的】

現代の世界を理解する上で、「民族」は極めて重要なキーワードである。コーカサス地方は、歴史的にも、また現代においても、非常に多種多様な民族集団を内包し、「民族とは何か？」という問題が非常に鮮明な形で表面化する地域である。

コーカサス地方の諸民族のうち、アゼルバイジャン人は、現在のアゼルバイジャン共和国、ロシア連邦ダゲスタン共和国南部を中心に分布し、比較的多くの人口を有している。コーカサス地方のみならず、イランの北西部にも多く分布する民族である。この「アゼルバイジャン人」という民族意識が明確な形で現れるのは 19 世紀後半のことである。しかし、17 世紀から 19 世紀前半の時点ですでに、その萌芽が見られる。よって、この時代の分析を行うことなしに、「アゼルバイジャン人」アイデンティティーの形成過程を真に理解することはできない。

本研究は、アゼルバイジャン人を具体的事例とし、その民族意識の形成過程を詳細に分析することで、「民族とは何か」という問いに解答の 1 例を提示しようとするものである。

【研究の内容・方法】

コーカサス地方は、南をイラン、西をトルコ、北をロシアに囲まれている。いわば 3 つの文化圏の境界上に位置する地方であり、それぞれの文化圏の影響を様々な形で被ってきた。故に、同地方の歴史の理解に際しては、ペルシア語、オスマン・トルコ語、ロシア語等で書かれた様々な史料を利用する必要がある。当然ながら、アゼルバイジャン語等、コーカサス地方の諸言語で書かれた史料も、無視できない。しかし、日本で利用可能な史料は、そのうちのごくわずかである。

そこで、まずイラン・イスラム共和国のテヘラン市、およびアゼルバイジャン共和国のバクー市における、各図書館、資料館、博物館等で関連史料の収集を行った。未公開の写本や文書を中心に、多くの貴重な史料に触れる機会を得た。また、現地以外では入手困難な研究文献等も収集することができた。とりわけ、バクー市内の書店でロシア語やアゼルバイジャン語の文献を数多く購入した。また、現地の研究者とも交流し、彼らから直接研究書や論文を頂くこともできた。イランのテヘラン市やタブリーズ市、トルコのイスタンブール市においても、多くの関連文献を入手した。

日本に帰国後、入手した諸資料を総合的に分析し、「アゼルバイジャン人」アイデンティティーの形成過程を追った。コーカサス地方に関する研究は、19 世紀以降に関しては豊富であるが、17~18 世紀に関するものは少ない。その原因の一端は、史料の少なさにある。本研究では、その点を、多言語の史料の利用によってある程度補うことができた。すなわち、ペルシア語、オスマン・トルコ語、ロシア語、アゼルバイジャン語の他、各西欧語の史料も利用することで、総合的な分析を可能としたのである。

また、従来のアゼルバイジャン民族の研究は、コーカサス地方とイラン北西部のどちらか一方のみに言及したものが大半であった。対して、本研究は、両方の地域を分析対象としている。これも、多言語史料の利用の成果である。

【結論・考察】

まず、19 世紀前半のアゼルバイジャン地方で活躍した歴史家であり哲学者・科学者であったバキュハノフの諸著作を分析の対象とし、彼の民族意識のあり方を明らかとした。その結果得られた結論は、非常に興味深いものであった。まず、彼は「アゼルバイジャン人」や「アゼルバイジャン語」といった呼称を用いておらず、それらに固有の名称を与えていない。しかし、その一方で、それらが他の民族、他の言語とは明確に区別されるものとして認識していた。また、彼は「東コーカサス地方」という地理認識を有していた。「東コーカサス地方」は、現在のアゼルバイジャン共和国東部とロシア連邦ダゲスタン共和国に該当する領域である。

さらに、別のアプローチとして、現在のアゼルバイジャン共和国における歴史認識のあり方を探った。「サファヴィー朝」を 1 つのキーワードとしつつ、そこに見られるアゼルバイジャン民族像、民族意識の変遷を明らかとした。